（別紙２）

審査の結果の要旨　　氏名　申 美那

藤原氏の一族である中流貴族「日野家」は、平安時代中後期、新興の儒者の家として中世的な宮廷学問の担い手となり、他方宮廷実務に練達するなかで、「名家」という家格を獲得した。鎌倉時代に有力庶家を分出し、やがて足利将軍家と親密な関係を結ぶにいたる。本論文は、そこまでの歩みを、日記・人事記録・故実書・古文書・漢詩文集・歌集・物語・説話集など膨大な史料を駆使して、全面的に描き出した。

「Ⅰ名家日野家の成立」では、10 世紀に藤原有国が豊かな文才と権勢者への接近でのしあがり、その子広業・資業の代に、儒学を家業として文章博士等の儒職を歴任すると同時に、弁官という宮廷実務の中心を担う官職に進出し（これを「儒弁」と称した）、その後数代のうちに、大中納言まで昇進できる「名家」という家格を獲得した経緯をたどる。日野家は、儒者の面では天子とその候補者の教育を主導し、実務官僚の面では「儒弁」の地位をほぼ独占した。この二本脚で立つことが、全般的な儒学の衰退、大江・菅原両家の地位低下のなかで、日野家の繁栄を支えるアイデンティティを構成した。

「Ⅱ勘解由小路家の成立」では、鎌倉初期に日野家から分立して、頼資・経光・兼仲三代にわたり質・量ともに優れた記録を残した勘解由小路家を素材に、日野本家との共通基盤や家としての独自性を解明しつつ、日野流全体が皇室や摂関家と密接な関係を保ちながら生きのびていったことを明らかにする。続く「Ⅲ柳原家の成立」では、宮廷が両統に分裂するなかで、後醍醐天皇が宋学をスローガンに鎌倉幕府を倒し、ほどなく足利尊氏が幕府を再興するという激動のなかで、儒学の教養と実務の練達を兼ね備えた日野家が家運を切りひらいていった経緯をたどる。

「Ⅳ日野家と和歌」では、天皇即位を確認する盛儀大嘗会で行われる和歌詠進に、儒者が歌人を凌駕する役割を演じたこと、儒者のなかでも「名家」の家格をもつ日野家が、大嘗会和歌の主役となって、多くの作品を残し家の故実を生み出したこと、を述べる。王権の支えとしての漢字・漢文や儒学の権威が、王権を荘厳する儀式を通じて、和歌の領域に浸透していくという構図は、中世文化史の重要な側面に光をあてるものである。

日野家については、将軍家の姻族として権勢をふるった室町時代に関心が集中し、その前提である家の成立～発展期は研究蓄積が乏しい。著者は、そこに切りこんで家の歴史を総合的に描き出すと同時に、日本中世における儒学のあり方如何という、韓国人留学生ならではの問題関心に立脚して、学芸史の研究にも一石を投じる成果をあげた。

ただし、史料の信頼度の弁別など歴史分析の方法論や、史料解釈の厳密性とその提示方法において、まだまだ研鑽・改善の余地がある。資業流（日野家）と比較しての広業流の評価や、家の自己認識における器量と譜代との矛盾をはらんだ関係など、もっと深めてもらいたい論点も少なくない。全体構成の点では、Ⅲの表題が内容と照応しないうえ、先行研究に大きく依存した概説風叙述になっていて、他の部分と比べて見劣りする。

以上、本論文は、いくつかの点でなお課題を残すものの、当該分野の研究を前進させる独創的な内容を備えている。同時に、韓国史学界に日本文化史研究の成果を伝達する役割も期待される。それらに鑑みて本委員会は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と判断した。